

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 ドストエフスキー 『罪と罰』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

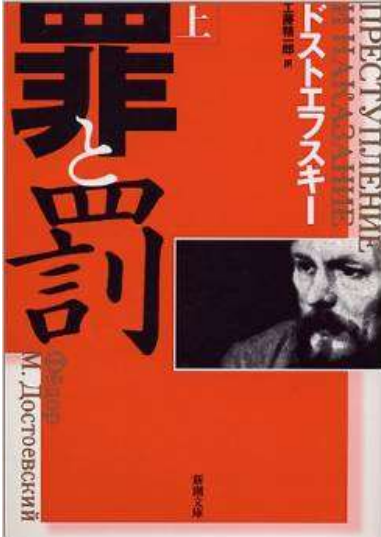
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 38 回のツイキャス読書会の課題図書は、ドストエフスキー 『罪と罰』です。

世界文学の金字塔です。登場人物が多くて、読みづらかったかと思いますが、読了して、読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。お疲れ様でした。

『罪と罰』 感想文

私は、今回初めて読みました。小説の存在は知っていましたが、ハードルが高いような気がして課題図書でなければ読むことがなかったかもしれません。

長いお話で、途中で誰がだれか分からなくなりながらも大急ぎで読んだので理解できていないかもしれませんが、私なりに読んでみて長い間読み次がれる良い作品を読むことが出来て良かったと思いました。

金貸しのおばあさんアリョーナ・イワノヴナと、その時、偶然出くわした、妹のリザヴェータ・イワノヴナまで殺してしまいそんな非道な事をしてしまうけれど、以前に道でふらふらしていた少女を心配してななしのお金をあげたり、ソーニャの父親のマルメラードフが死んだとき、自分もお金がないのに助けてあげたいという気持ちからお金をあげたりして、強盗したけど優しい気持ちもあって、それほどお金に執着していないのが不思議に思いました。

悪い人でも殺していいわけではないし、いけない事だけどリザヴェータ・イワノヴナも殺されてすごく気の毒だなと思いましたが、その事があってこそ罪について深く考えて悔い改める事ができたのかなと思いました。

私が一番感動した場面は、ラスコーリニコフがソーニャに

「だがそれで、神はきみに何をしてくれた？」

と問いかけた時、

「何でもすっかりして下さいますわ！」

と答えた所です。

すごく貧しくて家族の為に娼婦にまでなったソーニャなのに神様を信じて今ここにいられる事に感謝しているという風に思えて目頭が熱くなりました。

私がもし、ソーニャの立場なら一瞬でも神様の存在を疑ったかもしれない。それは本当の意味での信仰を知らないからかも知れませんが、ソーニャの事を考えて、本当の信仰について少し理解できたかな？と思いました。ラスコーリニコフは悪い事をしたけど、でも良いところもあるし、悪党ではないと思うので最後に希望が見えたので本当に良かったと思いました。

(おわり)

『罪と罰』 感想文

いや～、罪と罰を読むのは二回目なのですが、しばらく読書はもういいやと思ってしまうほど、『読んだ』という満足感でお腹いっぱいになってしまいました。

前は、新潮文庫版で読み、今回は読みやすであろう光文社の亀山版をチョイスし楽をしようと作戦を立てたんですが(宮澤さんすみません)、読みやすいけれども全然楽なんてことはなくてぐったり疲れてしまいました。

1週間以内に三冊読むのは、僕の中では結構ハードルが高い課題図書だったんですが、なんとか読了に間に合いました。

ラスコーリニコフが見た夢の雌馬がひたすら鞭でバシバシ打たれているシーンは、メル・ギブソン監督が作ったイエス・キリストが死ぬまでを描いた『パッション』にそっくりだと思いました。

ほぼ拷問シーンというクレイジーな作品ですが、興味のある方は良かったら見てみて下さい。

悪役のスヴィドリガイロフですが、マルファや他にも何人が殺していると言われているものの、ソーニャの家族を救ってくれたりするので、盗み聞きや浮気症といった変態で不気味な人ですが、根っからの悪人ではない気がしました。

罪と罰は、やはり第1部のマルメラードフさんは、僕の中で笑いのツボ(奥さんに引きずりまわされるシーンが最高)であり、こんなにカスミみたいな人物を魅力的に書くドストエフスキーは凄いと思いますし、嫌人症であるラスコーリニコフも助けたくなるほど愛されキャラだと思いました。

第6部でポルフィーリーがラスコーリニコフに自首することを勧めている場面は、ポルフィーリーの方が歳上でもあり終わった人間の一言としても、まだ未来のあるラスコーリニコフに愛を込めた一言だと思いました。

ソーニャやプリヘーリヤやドゥーニャはもちろん、ラズミーヒン、ゾシーモフもみなラスコーリニコフが大好きなんだと愛されている人だからこそ自殺も出来ず、天井の低い棺桶のような部屋からソーニャが『ラスコーリニコフ出てきなさい』と復活させる物語に仕上がっているのかな、なんて思いました。

(おわり)

イノマンさんのブログです。 『イノマンブログ』 <http://ameblo.jp/inoman-1984/>

罪と罰 Преступление и наказание

フョードル・ドストエフスキー

読書感想文

1860年代、ペテルブルグは政治も思想も急速に近代化していた。若い世代には古い宗教観にとらわれない分離派信徒が増えてきていたという。殺人を犯したラスコーリニコフが、あらためて神への信仰心を見つけ出し、自らの罪を背負って生きつづける理由をみつけるまでの群像劇。

船室と呼ばれる青年の部屋は、都会の暗渠のようにじめじめと暗い。夏なので蒸し暑い上に、開かれない本にはホコリが積もる。何日も外へ出ない理由など特にない。ただ強情に閉じこもっていたために、危険な思想に傾倒してゆく。自覚のないまま絶望の淵へと自らを追い込んでいった。

余談で蛇足の持論ですが、部屋の空気は毎日入れ換えなくちゃいけない。窓は大きく風の通る明るい部屋でなければならない。精神の健康のために。

ラスコーリニコフには太陽が足りなかったから、老婆を（ただ高利貸しだという理由だけで）しらみのごとく感じ斧であっさり殺してしまったのだ。

神の存在と倫理観。良心の呵責とは。自然と科学の対立。「罪と罰」で書かれたテーマはあまりに大きく、タテ糸とヨコ糸が不規則的に編まれている。圧倒的な人間愛を感じ、こまかく紐解くにはわたしにはもう少し時間が必要。印象的なのは人物の輪郭がそれぞれにはっきりと形作られ、ロシアの都会の真ん中で、いきいきと地に足をつけて生きている。ペテルブルグの夏の悲劇は少しの喜劇を混ぜながら、人間とは、人生とはと問われ、ニヒリストのラスコーリニコフと共に悩んだ。

自然は鏡ですよ。苦悩というものは偉大なものだからです。苦悩には思想があります。

ポルフィーリイ判事の言葉は、読み手に優しくも鋭く訴えかける。

自然は鏡。イエスキリストから遠い沼地の日本にいて同調できる部分は少ないが「おてんとさまはみている」という古来の道德観念はあらためて心に問うべきかと。窓は大きいほうがよい。

(おわり)

「死ね死ね団に AI (愛) を込めて」

江守徹さんの朗読を聴きました。

現代社会の中には他者だけでなく自分自身に対しても罪を見つけ出し、死という罰を与えたがっている人がいるようで、死ねや、死にたいの文字を見る機会がよくあります。まるで愛戦士レインボーマンに出てくる[死ね死ね団](#)のようです。

罪と罰を読んで、ナポレオンのような人間は人を殺してもいいと考えている人間と、実際に人殺しをした事があるけれど信仰の道に入り罪を償った人と、スビドリガエルフの様な得体の知れない人、それぞれ近所にいたとしたらどうするか？考えました。幼い子を持つ親としては警察の巡回を強化してほしいとか、情報を公表してほしいと思うかも知れません。

ただ住民組織を組んで追放運動をするわけにもいかないの、罪を犯す前の酒場にいるラスコールニコフの考えを受容し、共感し、否定せず、だけど彼の考えに飲み込まれないように何か良い提案ができないかと考えました。

① 所有物を棄てて山に籠る、または外国を旅する。

イワンのバカのようななれとは言いませんが、ブッダや老子も言う通りお金や財産を持つから少なくとも多くても不安になる。財産や地位を捨てツアラトウストラや鴨長明のように山に籠るのは難しくとも、自分の事を誰も知らない外国を旅するのはどうだろうか？ 己が一体何者かを探すことで自己欺瞞を捨てられるかも知れません。

② 労働者や健康を守る技術発展に貢献する。

人工知能やロボット、iPS 細胞技術が発展し、労働やストレスから人間が解放され、病気や障害を恐れない社会が現実になれば社会保障費が抑制され、安料理屋にいた将校や学生など前途有望な若者に回るお金が増えるはずです。

自分が社会の為に貢献するんだという思いがあれば、人を殺すという発想には至らないと思います。君にはそれができるはずだ！と強く言いたいです。

③ 目の前の事を受け入れ、自分自身を認める。

学校を辞めざるを得なかったり、家賃を滞納したり、ドゥーニャの結婚問題が生じたのは世の中のせいなのか？ 質屋の婆さんのせいなのか？ もしや君が憎いのは自分自身ではないのか？

僕は知っている。君が家族や友人思いなのを。僕が君の存在を認めるから、君は世の中を認め、そして自分自身を認めてはどうだろうか？それには努力が伴うだろう。でも僕はそうする事を勧めます。

いつかラスコールニコフのいる街に愛の虹がかかりますように。

(おわり)

『罪と罰』 読書感想文

お金ってなんだろう？

20年位前、「ナニワ金融道」の青木雄二さんが「罪と罰」を熱心に紹介されていました。「お金」ってなんぞや？ という事を口を酸っぱく伝えて下さっていたのに、私には何も伝わらず、お金が目的になってしまい、今思うと、大切な何かを膨大に失ってしまいました。今現在の自分の空虚さは、全てそれに起因しているのだと思います。その当時、どちらの作品も熟読したつもりでしたが、エキセントリックな登場人物の会話や心理的な描写がただ面白いとしか理解していなかったと今回再読して、思い知りました。

「罪と罰」は、自称白い手の高等遊民スヴィドリガイロフが渦の中心となり、その時代の社会情勢に様々な人達が翻弄される様が描かれています。スヴィドリガイロフは主人公ラスコーリニコフの将来像です。極論になってしまいますが、そんな彼が直接的にも間接的にも、お金をばらまく事で、物語が最終的に丸く収まった形に単純な私には思えてしまいました。実際は様々な人達が絶妙に絡み合った壮絶な物語です。もう、すごいとしか言いようがありません。スヴィドリガイロフは悪党でしかないのかもしれませんが、恋のライバルであるラズミーヒンを正当に評価します、ソーニャやドーニャにも彼に頼る事を勧めます。ラスコーリニコフもドーニャに、ラズミーヒンは愛する事ができる男だと伝えます。一方ルージンは地位もお金もあるのに、スヴィ&ラス組の評価が気の毒なくらい低いです、鼻にも引っ掛けてもらえません。ですが私には、ルージンはあまりにも人間的で一番リアリティを感じ、こころのせこさ等、悲しい事に自分に一番近い登場人物に感じてしまいました。お金が目的の人ルージン VS お金が手段の人ラズミーヒン。類は友を呼ぶと言いますが、私の周囲はルージンでいっぱいでした。スヴィドリガイロフのいう「無難な青年ラズミーヒン」は、私にとったら、残念なことにまだまだ稀れな存在です。

(おわり)

『 一粒の麦 』

貧困に喘ぐ頭脳明晰なラスコーリニコフは、『一つの悪事は、百の善行によって償われる』との自らの持論により、老婆殺しを執行してしまう。この老婆が強欲な高利貸しだった為、持論を盾にして「罪」の意識はなかった。ただ、自らの計画に関係のないリザヴェータを殺害してしまったところから、罪の意識に追い込まれる。

飲んだくれの父親と病気の継母を抱えるソーニャに出会い、なぜ自らより劣悪な状況であっても強く生きていけるのか、彼女に興味を惹かれる。娼婦に身を墮としてでも、信仰と清らかな心根を持つソーニャに、ラスコーリニコフは無意識に救いを求めてしまう。

彼女が嫌がっても、「ラザロの復活」(ヨハネの福音書第11章)を読んでもらうことに固執するラスコーリニコフ。くしくも、殺人により一度は精神的に「死んだ」ラスコーリニコフがラザロに、ラザロを肉体の死から蘇らせたイエスがソーニャに重なった。

貧民であったところは、ラザロとラスコーリニコフは共通点しているが、死後神の前で慰められるかという点では全く違う。信仰のないラスコーリニコフを見抜いていたソーニャは、自らを救ってくれた彼に寄り添うこと決めたのだ。

同じ聖書に「一粒の麦」(ヨハネの福音書12章)という「一粒の麦は地に落ちて死ななければ、それはそのまま残る。しかし、それが死ぬならたくさんの実を生み出す。」という一人の犠牲によりたくさんの人が救われるという話がある。ソーニャは、「死んで」いるラスコーリニコフに、死んだ後ならまた新しく生まれ変わると説きたかったに違いない。信仰的に生まれ変わるのなら、罪を認めて世界中に懺悔せよと迫るソーニャ。実際に十字架を貫き、十字路に向かったラスコーリニコフ。彼は、生まれ変わったのだ！

ソーニャを偶然救ったことにより、『一つの善行が、百の悪事を償う』となったラスコーリニコフ。なぜなら、ドゥーニャに拒否されたスヴィドリガイノフは自害に行き着くしかなかった。彼にとってのソーニャがいなかったからだ。

ラスコーリニコフは思い違いをしていた。人間は「凡人」と「非凡人」で分かれていたのではなく、「信仰心」や「清らかな心根」で分かれていたということ。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

『新しい旋毛虫』

(引用はじめ)

それは、人体にとりつく微生物で、新しい旋毛虫のようなものだった。しかもこれらの微生物は知恵と意志を与えられた魔性だった。これらにとりつかれた人々は、たちまち凶暴な狂人になった。しかも感染すると、かつて人々が一度も決して抱いたことがないほどの強烈な自信をもって、自分は聡明で、自分の信念は正しいと思いつむようになるのである。(エピローグ P593)

(引用おわり)

現在の青年にも多数のラスコーリニコフがいる。相模原で重度障害者を 19 人殺害した植松聖も、頭に虫が入っている。

凶暴な狂人でしかない植松がてめえの勝手な理論で殺人を正当化する姿は、メディアに流れる度に、視聴者の頭の中に旋毛虫の卵を植えつけているようなもので、不愉快である。

強烈な自信をもって、自己正当化を繰り返すナルシストの頭には、植松と同じ種類の旋毛虫が這いずり回っている。テレビを観ていると、そんな奴ばかり出ている。

しかし、旋毛虫の危険性を説明するのは難しい。誰もが多かれ少なかれ、すでに、旋毛虫に感染しているからだ。

ドストエフスキーは、政治思想や宗教が、旋毛虫のように荒れ狂い、自己正当化というかたちで人間を食い尽くしていくさまを執拗に描いている。

私は一理というのは、危険だと思う。詭弁にも一理あるかも、と共感すると、そこから旋毛虫が入り込んでくる。また、ナルシズムやサディズムとマゾヒズムというのは旋毛虫の温床である。マルメラードフは、ソーニャが売春で稼いだ金で酒を飲んで管を巻いていた。スヴィドリガイロフは、人の虚栄心をくすぐって近づき、やがて相手の弱みを握り、人格を支配してなぶりものにすることで生きてきた。自殺のように死んだ彼らも、結局は、旋毛虫に食い尽くされていったのだ。

人間こそが、この大地の皮膚にはびこる病だ、とニーチェは、ツァラトウストラに言わせている。

『大地に接吻しなさい。だってあなたは、大地に対して罪を犯したんですもの』とソーニャは言った。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください http://bookclub.tokyo/?page_id=2343